

年歴へだたれり、又萬葉集の歌に、みなつき、ふ月、長月などの名目はよめれど、は月とよめる歌み
 えす、後撰和歌集には、月ばかりに、又は月なかの十日計になどみえ、八月はつきと秘藏いへれど、
 此月の名義を沙汰せるは、興義抄に、八月木のはもみちておつる故に、葉落月といふを、よこなま
 れりといへるぞ、初なる、漢武帝の秋風辭に、秋風起兮白雲飛、草木黃落兮鴈南歸、とあるによれる
 か、黃落の字、葉落月の義に合り、鴈南歸の字、久方の雲井のかりのこしちより初てくるやはつき
 成らん、とよめるに合り、下學集、日本歳時記、歳時語苑等皆此説によれり、秘藏抄歌に、初鴈の聲き
 こゆなりはつき立朝の原のうす霧のまに、又新撰六帖爲家卿の歌に、久方の雲井のかりのこし
 ちよりはじめてくるやはつき成らん、とあるに、類聚名物考、月令を引て、此月初めて鴈の來れば、
 初來月つぎなるを、辭をはぶきて、はつきとはいふなるべしといへるは、秘藏抄の歌とあへり、亦一説
 は、葉月、稻葉月也、稻葉茂ルを云フト跡部光海翁説いひ、八月を波月といふは、保波利月の上下をはぶき
 いへり、稻は皆八月穂を張也と語意いへり、本居宣長も語意の説にしたがへり、委細に古事記傳詞
志比宮の卷に辨じ
 置り、さて以上三説を合せ考ふるに、古説新説ともに何れも理りなきにしもあらねど、秋三月は
 稻の成熟する次第もて解かたまかるべし、所謂七月をふくみ月といふは、穂蒼むをいひ、八月は
 穂張りみゆる義もて名付る也、いかにとなれば、秋といふ名は、百穀成熟の時をいふ、穀物のあき
 満る義にとれるなれば、かたゞ、秋三月は、稻の事もてとくかたまかるべし、さて此月の異名を
 さ、はなさ月と秘藏抄いひ、木染月、草津月と莫傳抄いひ、秋風月、月見月、紅染月と藏玉集いへるも、和歌
 よりいでし名目なり、橘春といふ名目は、漢名なるべけれど、出所詳ならず、たゞ日本歳時記にみ
 えたれど、たしかなる書に未見、當、鴈來月、燕去月などいふは、世俗の稱する名目にして、古書に載
 ざれども、仲秋之月、鴻鴈來賓と禮記月令いへるによりて名付し也、燕去月と云は、玄鳥歸と同上いへり、
 玄鳥玄鳥は、鴈來月に對して名付しなり、秋半となふるも、八月は、秋三月の半なればなり、あけば又